10月	豊川　愛護モニター報告	モニター区間	豊川：左右岸 6.2km～17.8km 管轄出張所：豊川流域治水出張所
実施日		実施区間	吉田大橋～賀茂橋

～「すすき」はどこへ行った？～

中秋の名月に最も似つかわしい草といえばやはり「すすき」であろう。しかし、中秋の名月がある９月に、豊川の堤防で「すすき」を見かけることは少ない。この時期に圧倒的に目に付くのはセイバンモロコシだ。土手を覆い尽くさんばかりに群生している。特に豊川左岸の下条橋下流から三上橋あたりまではほとんどセイバンモロコシで埋め尽くされている。

しかし、10 月になるとあちらこちらで「すすき」が穂を伸ばしはじめる。セイバンモロコシほどではないが、堤防の土手でも群生している場所があるし、河川敷ではかなり広範囲に穂をなびかせているところがある。中秋の名月には間に合わなかったとしても、「すすき」は健在であるかのように見える、と、 かつてはそう思っていた。しかし、正確に言えば、これらの「すすき」は必ずしも「ススキ」ではない。その多くは「オギ」という別種の植物なのだ。「ススキ」と「オギ」は見かけは極めてよく似ているのだが、茎が稲のように一ヶ所から分岐する「株立ち」であるのに対し、「オギ」は地下茎を伸ばして繁殖し、株を作らない。また、小穂（ふさふさした穂の一つ一つ）に生える毛が「ススキ」に比べて「オギ」の方が長く、その結果「オギ」の方が「ススキ」よりもふさふさして見える。「尾花」は「ススキ」の別名だが、実は「オギ」の方がはるかに「尾花」っぽい。

ススキ

オギ

見慣れると両者の区別は簡単にできるそうだが、他の草も生い茂る堤防沿いで株立ちであるかどうかは確かめづらいし、穂がにぎやかだから「オギ」だと思って穂を手に取ってよく見てみると「ススキ」だったということもある。しかも、両者はすみ分けしているわけではなく、同じところに混在していることも少なくない。上の写真は両者の典型的なものを上げたつもりだが、100%そうかといわれると自信がない。したがって、よほどの物好きならばいざ知らず、ふつうの通行人にとっては両者を区別することは容易なことではない。ただ、ただ、私なりに観察してみると、全体的にはやはり「オギ」の方が多く、上流に行くにしたがって「ススキ」が目立つようになってくるという印象である。

したがって、「ススキ」が少ないということは事実であるようだ。しかし、昔から私たちはそんなに正確に「ススキ」と「オギ」を区別していたのだろうか。むしろ、一般人からすれば「ススキ」も「オギ」も「すすき」として区別することなく、同じように秋の風物として親しんでいたのではないだろうか。その意味では、セイバンモロコシに追いやられていると

はいえ、「すすき」はそれなりに健在だと言ってもいいのではないか。専門家には怒られるかも知れないが、そんな風に思ってはいけないだろうか。

もう一つ、10 月に目立つ植物にセイタカアワダチソウがある。黄色い花がはでな上に群生するので目立ちはするのだが、堤防の土手ではセイバンモロコシと比べると少数派である。むしろ河川敷や休耕地でよく見かける。

セイタカアワダチソウは一時期、急速かつ広範囲に繁殖し、「すすき」をはじめとする在来種を駆逐し、さらには花粉症の原因となる（これはぬれぎぬだったのだが）とされ、最もたちの悪い外来種と見なされていた時期もあった。しかし、セイタカアワダチソウは 1990 年代以降はむしろ衰退傾向にある。セイタカアワダチソウが他の植物を駆逐した理由の一つに、他の植物の生育を阻害する化学物質（アレロパシー物質）を生成することがあったのだが、このアレロパシー物質のためにセイタカアワダチソウ自身の発芽が抑えられ、衰退をまねいたとされている。

繁栄を謳歌した種が繁栄を支えた自らの特徴によって衰退していく。そんな自然の摂理に、何か意味深なものを感じてしまう。